白金薮

11月号

平成26年11月発行　　第45号

白金葭定例句会案内

十二月十九日(金) 12:00～15:00 ア第五学習室　兼題：神楽、都鳥

一月十六日(金) 12:00～15:00 ア第三学習室　兼題：新年一般

17:00～19:00 新年会(備前)

二月二十日(金) 12:00～15:00 ア第三学習室　兼題：山焼、鶯

神楽、都鳥の参考句（12月19日分）

おもしろもなふて身にしむ神楽哉　北枝

くるぶしのきれいなおかめ神楽舞う　和田君子

一隅を得て寒がりし神楽笛　星野昌彦

夜神楽のしばしば空に向く顎よ　武田伸一

生まれたての牛の息づく神楽宿　柚口満

神々が火の始末して神楽果つ　黒田青磁

佃煮を買ふ用ひとつ都鳥　稲垣きくの

昔男ありけりわれ等都鳥　富安風生

都鳥汝も赤きもの欲（ほ）るや　山口青邨

飛ぶも浮くもゆるぎなき白ゆりかもめ　森たけ子

貨物船はや百合鷗来てをりぬ　中村行男

ゆりかもめ透明な壁あのあたり　堀之内長一

明治座の幟は赤し都鳥　内田ゆたか

月例句会報（14／11／21　7名欠2名　蒟蒻掘る、木の葉髪）

外出の肩のほらそこ木の葉髪　飯田孝三

なつかしき青い山脈木の葉髪

蒟蒻掘る上毛三山どんと晴れ

山畑に大き影曳き蒟蒻掘機

袴すつぽりぬけし団栗侏儒のこゑ　増田陽一

柴漬の上ゆく鯉や沼の冷え

独語して寝入るならひや落葉急

鳥渡る北方領土烏賊も渡る

すずめ蜂掠めてゆきし木の葉髪

蒟蒻掘る上州の山傾けて　光成高志

蒟蒻掘り早上州の空っ風

蒟蒻掘り無料バイキングいつも混む

雑巾にまとわりつける木の葉髪

蒟蒻選り腰掛腰に括りつけ
腰弱の四つん這いひ拭き木の葉髪

汁椀にはらりと落つる木の葉髪
床這ひし祖母の晩年木の葉髪
葱の名の駅へと電車冬来る
夫婦して日暮まで選る蒟蒻玉
掘られゆく蒟蒻芋と土塊と

しぐるるや雷門に待ち合はす
立冬や生みたて卵カチと割る
植木屋の昼の一服鵙日和
山を背に蒟蒻掘りの日のつづく
木の葉髪子のひと言に癒されて

甘・辛もフルーツも好き木の葉髪
豆腐屋のポケット銭と胼薬
木の葉髪夜をひとりの養命酒

光　みち

母夜ごと針すべらする木の葉髪
榛名山向く窓あけ宿の干布団

吉羽多美子

早発ちす蒟蒻掘の上州へ
永らへし命生かせず石蕗の花
一の酉七輪のまだよごれずに
木の葉髪なくなりぬ夢なくならず
二人して夢をひとつの熊手かな

松村幸一

何もかも少し淋みしい木の葉髪
掘りたての蒟蒻玉は地雷並
自然薯の穴はおおむね座棺なみ
地に半鐘消防小屋が壊される
ななかまど女化稲荷の刃物売り（女化稲荷牛久市女化）

倉田紀子

木の葉髪お互さまと笑ひあひ
遠山の影冴えにけり蒟蒻掘る
蒟蒻を煮る匂ひゆかしや縄暖簾

青木啓泰

武者昭七

幾山河越え来た印（しるし）木の葉髪
黒髪の乙女なりしか木の葉髪

お詫びと訂正

誤　むくろじは頂ふ葉のなき葉かな（44号小山陽也）
正　むくろじは頂小葉のなき葉かな
（無患子の葉は偶数羽状複葉（うじょうふくよう）であり、奇数羽状複葉の先ちょにある葉、これを頂小葉というが、この葉がないことを詠われたのだ。陽也さんから「葉っぱ博物館」の写真つき資料を頂いた。お詫びして訂正します。）

選句結果（数字は入選数　左添書きは添削句）

4　蒟蒻掘り早上州の空っ風　高志
3　早発ちす蒟蒻掘の上州へ　幸一
3　ななかまど女化稲荷の刃物売り（女化（おなばけ）稲荷牛久市女化）　啓泰
3　一の酉七輪のまだよごれずに　幸一
3　蒟蒻選り腰かけ腰に括りつけ　高志
3　蒟蒻選り腰掛腰に括りつけ
3　母夜ごと針すべらする木の葉髪　紀子
2　しぐるるや雷門に待ち合はす　多美子
2　掘りたての蒟蒻玉は地雷並　啓泰
2　豆腐屋のポケットに銭と胼薬　紀子
2　蒟蒻掘る上毛三山どんと晴れ　孝三
2　植木屋の昼の一服鵙日和　多美子
2　山を背に蒟蒻掘りの日のつづく　〃
1　甘・辛もフルーツも好き木の葉髪　紀子
1　外出の肩のほらそこ木の葉髪　孝三
1　柴漬の上ゆく鯉や沼の冷え　陽一
1　木の葉髪お互さまと笑ひあひ　昭七
1　自然薯の穴はおおむね座棺なみ　啓泰
1　永らへし命生かせず石蕗の花　幸一
1　遠山の影冴えにけり蒟蒻を掘る　昭七
1　遠山の影冴えにけり蒟蒻掘る　孝三
1　なつかしき青い山脈木の葉髪　多美子
1　立冬や生みたて卵カチと割る　昭七
1　蒟蒻を煮る匂ひゆかしや縄暖簾　紀子
1　木の葉髪夜をひとりの養命酒　昭七
1　幾山河越え来た印（しるし）木の葉髪　陽一
1　すずめ蜂掠めてゆきし木の葉髪　孝三
1　山畑に大き影曳き蒟蒻掘機　幸一
1　木の葉髪なくなりぬ夢なくならず　みち
1　夫婦して日暮まで選る蒟蒻玉　陽一
1　蒟蒻掘る上州の山傾けて　幸一
1　二人して夢をひとつの熊手かな　紀子
1　榛名山向く窓あけ宿の干布団　みち
1　掘られゆく蒟蒻芋と土塊と

木の葉髪子のひと言に癒されて　多美子
袴すつぽりぬけし団栗侏儒のこゑ　孝三
何もかも少し淋みしい木の葉髪　啓泰
黒髪の乙女なりしか木の葉髪　昭七
腰弱の四つん這いひ拭き木の葉髪　高志
地に半鐘消防小屋が壊される　啓泰
葱の名の駅へと電車冬来る　みち
鳥渡る北方領土烏賊も渡る　陽一
雑巾にまとわりつける木の葉髪　高志
独語して寝入るならひや落葉急　陽一
蒟蒻掘り無料バイキングいつも混む　高志
床這ひし祖母の晩年木の葉髪　みち
汁椀にはらりと落つる木の葉髪　〃

一句鑑賞

柴漬の上ゆく鯉や沼の冷え　光成高志　陽一

柴漬ふしづけは柴を縛って沼底に漬けその中に入って眠る小魚や海老を獲る漁法を言う。中々原始的な魚の取り方だが、寒さをさけて魚が集まってきて柴の中に潜むので合理的な漁法といえる。「柴漬をおもむろに去る海老のあり」（本田あふひ）と云う句もあるから、海老ならぬ鯉ならその上を悠々と去っていくであろう。冬に入った沼の風景を寿いでいる風情がある。無論句会場の南に広がる手賀沼の讃歌でもあろう。

木の葉髪お互さまと笑ひあひ　昭七

陰暦十月の木の葉髪と言って、晩秋から初冬に掛けて木々の葉が落ちる頃、人の毛髪も普段より余計抜けるのを木の葉髪というのだが、これを肌身に感じるのは年をとってからである。髪が痩せて細くなり木の葉の落ちる如く抜け落ちるのである。「何もかも少し淋みしい木の葉髪」（啓泰）である。ついつい境涯にかこつけて詠うことが多くなる。掲句は何か失敗をやらかして二人でお互い様と笑い合っていてもいいし、木の葉髪の頭を撫でつゝお互い様とその鬱憤を笑い飛ばしているとも想像できる。笑い合ってやがて淋しき二人哉ではあるが。

永らへし命生かせず石蕗の花　幸一

一読、幸一さんの奥様の闘病生活を思った。しかし今もう一度読むと作者自身の来し方に対する忸怩たる思いを述べられた述懐の句ではなかろうか。今月丁度幸一さんは卒寿になられた。永らえた命を実感されたのではないでしょうか。中七の「命生かせず」は謙遜でしょう。石蕗の花に全てを託した人生の感慨ではないでしょうか。石蕗の花は、花のない頃の冬の庭に黄色の花を咲かせて庭を明るくする。花弁同士に透き間があって少し淋しい花である。鷗外がよく暗愁催すという言葉で締めくくっているが、石蕗の花は暗愁催す花ではなかろうか。見掛けは明るいのだが何故か悲哀に満ちた花ではなかろうか。

中七までの述懐はそういう悲哀をも皆飲み込んで石蕗の花と切られた思いに全てを放下されたのだ。

蒟蒻掘る上毛三山どんと晴れ　　孝三

蒟蒻掘る背景との取り合わせ句であるが、下五の「どんと晴れ」が面白い表現である。ＮＨＫ連続テレビ小説二〇〇七のタイトル「どんど晴れ」は、岩手の民謡の最後に使う「どんどはれ」という言葉と、岩手の広く晴れ渡る空のイメージからとった造語です。民話でつかわれる「どんどはれ」は、めでたしめでたしの意味とか。ここでは「どんと晴れ」だから、文字通りに読み取っていい。妙義山・榛名山・赤城山の上毛三山が冬青空に見通せる上州の蒟蒻掘りが目に浮ぶのである。蒟蒻掘りの地味な作業にはややきれい過ぎるが。

夫婦して日暮まで選る蒟蒻玉　　みち

今月の季語探訪の取材句である。午前中に掘った蒟蒻芋が畝に転がっている。一年ものである。豆大福並みでまだ小さい。来春の植え付け用に選別する。一つ一つ手に取って選ぶ。しゃがんでする作業なのでつらい。そこで発砲スチロールの椅子を腰に括り付け、腰掛けながら移動しながらの作業である。日暮れまでには全部選んで持ち帰る。残さない。これを年末までくり返すのである。そして翌年は二年ものを同じように掘り選び、翌々年の三年ものになったものを収穫してやうやく出荷する。この時は、南瓜並の大きさだ。この大きさが一番味がよいとか。見たのは老夫婦であったが、老を取って、想像の幅を広がらせているのは作者の優しさでろう。

一句鑑賞　　飯田孝三

しぐるるや雷門に待ち合はす　　多美子

東京の待ち合わせ名所といえば、西のハチ公、東の雷門。とりわけ最近は、台東区浅草雷門の台頭ぶりが目覚しい。待合せ人の多国籍ぶりも話題だ。大きな吊提灯の左右、雷神風神の前である。佇ち並ぶ肩に、折りしも時雨が降りかかる。“人恋し灯ともしころ”ならば、ネオンの明りに雨がきらめくだろう。現代の大都会の一角、哀感にじむ街頭風景である。雷門ならではの一句。

ななかまど女化稲荷の刃物売り　　啓泰

ところは牛久市女化、してみれば社名は地名に因む。そこに稲荷を祀るあたり、なんとも曰くあり気だ。いやはや、境内に真嚇な七竈が垂れさがる、なみあむだなみあむだ・・、ギョッ、刃物屋さんだ。屋台かお店か知らないが、刃物の売り出しはいつ頃だ、初代の洒落っ気が逸品。参詣のご利益は、さて女難除け？

蒟蒻選り腰掛腰に括りつけ　　高志

この頃では蒟蒻は機械掘り、超重量トラクターでやる。掘り出された泥んこ玉の泥落しと蒟蒻の等級選り分けが

人手仕事。これが大変、蒟蒻干しとつづき、十一月初めから暮いっぱいかかる、農家の人たちは大忙し。さて泥落しと分別、一々腰掛を手運びしては量はかいかぬ、小ぶりの腰掛を腰に括り自在に仕事に没頭する。弾む口誦と相まって、作業の身ぶり手さばきが目に見える。蒟蒻「選り」はいわゆる動名詞形。

母夜ごと針すべらする木の葉髪　　紀子

昭和三十年代ごろまでは、よく見られた日本の母である。女は生業なりわい担手、その上に母、主婦の役割を負う針仕事はいつも夜なべ。日頃、欠かせぬだいじな仕事である。そんなに明るくない灯下の下に座り、一心に針を運ばせ、時々白毛まじりの髪に縫針をすべらせ、運針をせく。たまさかに目に触れる木の葉髪が在りし日の母の姿、仕種を思い出させるのである。

二人して夢をひとつの熊手かな　　幸一

熊手は酉の市で売られる開運の縁起物。商売繁盛を願う商人達だけではない、幸運、倖せを願うのは誰も同じ。二人は若い夫婦、恋人同志でもいい、誓い合って幸福を念じる。いや熟年老夫婦でもいい、ならば、追憶の胸中に去来するのは・・、読者に委ねる。別に「一の酉七輪のまだよごれずに」、「一の酉」だからきれいなのではない。「七輪」は屋台のそれ、あるいはかの日、新所帯の真新しい七輪とも。さすれば「よごれずに」の抱懐は深い。

掘られゆく蒟蒻芋と土塊と　　みち

今では蒟蒻は機械で掘る。大層な重機がゆっくり進み、蒟蒻芋を掘り出していく、土塊まがいの泥んこ玉である。それからが、前述、人手による大仕事だが、掲句が見せるのは、トラクターのする蒟蒻芋の掘りたてっぷり。〜「ゆく」と客観し、〜「と」〜「と」と呼応、土まみれの蒟蒻玉が、ぼこぼこ掘り出されていくさまを云わず、ありありと目にみせる。平明簡潔、見事だ。

（出句一覧掲載順）

一句鑑賞　　松村幸一

蒟蒻掘り早上州の空っ風　　高志

蒟蒻掘りの現場を知らないので鑑賞も屁っぴり腰になりそうだが、めげずに書きます。上州といえば昔から蒟蒻の名産地、空っ風も又季節の名物。蒟蒻掘りや作り方の実態や規模は様変りしようとも、時がくれば土を相手どる営みはつづけられ、風も訪れよう。この句「早」という一語の働きが大きくこれが季重なりの大難を退けるばかりか、言葉の端々にかけて生きた命を通わす。これで乾ききった遠来の風音が、現場を知らぬ読み手の耳元にはためき出す。けだし不易流行の一句であるまいか。但し、掘りより掘るとしたら如何。

蒟蒻掘る上毛三山どんと晴れ　　孝三

「どんと晴れ」が、いかにもいいなあ。上毛三山という字余りの中七を重く背負いながら、明るく力強くはねかえしている。それが蒟蒻掘りの労働現場への挨拶にも励ましにも感謝にもなっている。種明かしをすると、作者は、蒟蒻掘りの現場は見ていないとのこと。言ってみれば実地を踏まぬ題詠。そうと聞いても裏切られもしなければ、興ざめもすまい。むしろ事実や経験に依拠しないでもひとり立ちの出来る言語の美の、不思議な力強さに思いを馳せるだろう。**「みちのくの淋代の浜若布寄す」**と詠んだとき青邨は淋代を知らず、まして若布が寄すかどうかも知らなかった。若布など寄せないとそののち分かっても、読者は今もこの句の中に寄せてくる若布の実在を疑わずに愛している。ならば、若布の句以上の信憑性をもって、蒟蒻掘の背景にどんとかがやく上毛三山の山なみの晴姿を、仰ぎ見ることにしよう。

すずめ蜂掠めてゆきし木の葉髪　　陽一

ぼくの北柏駅への通い路に、人の手入れの届かぬお茶の垣根がつづいて、連日花盛りである。ところがいつからか「近寄るべからず」と記されたテープが、ものものしく張りめぐらされた。「雀ばち注意」ともある。お天気のいいある日、たまたまこの句と全く同じ体験をした。但し、ふつうの蜂であったかも分からない。この句を掠って行った雀蜂も、多分真夏どきの勢力には遠かったであろう。でも、このとき作者ははからずも、木の葉髪たるわが身の年齢を意識したのだ。すずめ蜂との出合いが、どうして木の葉髪（たるわが身）を触発させたのか説明するのは厄介だが、説明ぬきで納得出来る不思議な一句。しかも従来の境涯的思い入れをはるかにぬきん出た新境涯と申そうか。

しぐるるや雷門に待ち合はす　　多美子

清記が回ってきたとき「しぐるるや」が動きそうで、いったん見送った。類想がありそうとも思えた。でも少し間を置いてとくと見ていると、次第に滋味がひろがって来た。近ごろ、こういう経験をしばしばする。前掲すずめ蜂の句もそうだった。選者失格かもしれないが、今は必ずしもそうとも思わない。この句雷門という場所の選定が何よりよろしく、雷門が招いたかのような一ト時雨だから、待ち合わせしている人々へ一層の華やぎと期待をもたらす。まわりには若い人力車夫の活気ある呼び声が行き交っていよう。又真正面の仁王門からは歌舞伎舞台の町屋遠見（まちやとうみ）めいた仲見世の奥行きが、はるかまで望めている筈だ。読み手は視覚と聴覚を動員して、しばらくの間この刻々と変化に富んでやまぬ全光景に遊ぶことにしよう。

一句鑑賞　　増田陽一

自然薯の穴はおおむね座棺なみ　　啓泰

山野に自生する山の芋を上手に掘るのは難しいらしい。枯蔓を頼りに何処まで伸びているか判らない芋を探りながら折らないように回りを広く掘って行く。秋終るそぞろ寒い山中で、汗も出るし疲労もした。芋は大物であったようだけれど、徒労感もあり、掘った跡が座棺ほどというのは人生への苦いユーモアである。衝撃の一句。

蒟蒻選る腰掛腰に括りつけ　　高志

掘った芋を選定してよい芋は更に成長させるか、小さくても蒟蒻にしてしまうかの判断をする、立ったり座ったりの作業だから発砲スチロールを腰に括り付けて、という工夫だそうである。現地で発見した状景がリズムのよい表現に活写されていて面白い。ついでに余計だけれど、外国人に「What time is it now?」というよりも「掘った芋いじるな」と言う方が通じる、との説がある。

掘られゆく蒟蒻芋と土塊と　　みち

接近して見た臨場感のあるところ。大きな土塊に混じって掘り返されつつある奇怪な根茎である。大体、蒟蒻植物は蝮草など他の天南星科同様に奇怪である故に独自の興味を引く。斉藤茂吉は「肉眼に見る」と言った。「しみじみと肉眼もちて見るものは蒟蒻ぐさのくきの太たち」（茂吉）

蒟蒻掘る上毛三山どんと晴れ　　孝三

遠山の影冴えにけり蒟蒻掘る　　昭七

早発ちす蒟蒻掘りの上州へ　　幸一

兼題の「蒟蒻掘り」に、僕も行きたかったが行けなかった。これらの句は皆、想像での作句と伺ったけれど、それだけにいづれも秀麗の大景として把握されていて心地良い。諸家の想像力に敬意を表するのみ。

二人して夢をひとつの熊手かな　　幸一

酉の市に売る、福を掻き寄せる縁起ものの熊手に、揃っての幸運を願うという市井ふうの夢が暖かい。これが若い夫婦だったら可愛い夢で済むけれど・・。ここでは「二人して、ひとつの」との完成した巧妙な表現に感服するのみである。

しぐるるや雷門に待ち合はす　　多美子

赤い巨きな提灯の目立つ雷門。この頃は海外からの観光客も多い。浅草での待ちあわせの目印には最適であろう。「時雨」と「雷門」と「待ち合わせ」を配したところが絶妙で、微かな哀愁と慌しさを匂わせて、荷風の小説のように待ち人の境遇を想像してしまう。

豆腐屋のポケット銭と胼薬　　紀子

早暁から冷たい水を扱う豆腐屋はさぞ手が荒れることであろう。その前掛けの袋に釣銭の銭と皹皸の薬とが入

っている、と言うのはいかにも個人営業の素朴な豆腐屋らしいところに眼が行き届いている。

ハガキ句四十四報管見　　飯田孝三

ハガキ句44報（'09／3／8）

犬のいない庭に来てゐる寒雀　　孝三

一月二十五日例の会新年句会

ゼブラゾーン塗り果へ春を待つ沼で　　悦子

朝風呂や遠くの山の雪兎　　陽一

縄文の土偶の臍まへ御慶かな　　孝三

待春や大きく揺れる耳飾り　　たか子

笹子鳴く無為に過ぎたる日のあまた　　のり子

裸木のお話会の札下がり　　賀子

大寒のかくもやさしき退職後　　不憫

鶏小屋の跡形もなく梅匂ふ　　敏子

自転車の籠を食み出て独活過ぎぬ　　高志

探梅行拾ひし石の温くむまで　　哲也

二月二十六日上野梅の花にて雛の膳

洞門のそこら縄張り若布刈婆　　万世遊

西行忌一人電車に揺られ来し　　高志

雛の灯のともる頃まで語り合ひ　　璃子

啓蟄のマスカラ飽かぬ千代田線　　孝三

烏瓜これが種ぞとＰＲ　　陽也

雛の灯のともる頃まで語り合ひ　　璃子

雛祭は女児の倖と成長を祈る伝統の歳事。昨今は、オフィス・ビルやホテルなどでも目抜きの場所に雛を飾る。雛とその飾り様は時代やお国ぶりを映して興味深い。ご存知、「明りをつけましょ…」、雛には“灯”。灯は人恋いの情を誘う。「人恋し灯ともし頃をさくらちる」（白雄）。雛の灯に、人は“雛”の謂れを思い、眼前の雛達に、幼い日の雛遊びの場面を重ねる。在りし日の父母、はらから、はたまた幼な友だちの顔が目に浮かぶ。掲句、連用止め「語り合ひ」に籠る情懐の深い所以である。

平談、自づからの調べが妙である。艶こめ、きらめいて和み（上中）、円かに輪を広げて（中下）、しめやかに納める（結）。通じて音色、リズムがめりはり利き、滑らか。諳じて快。

西行忌一人電車に揺られ来し　　高志

芭蕉の旅は、添い人を具し、あらかた馬上、籠中。遡る西行の遊行は、詳らかにしないが、徒だっただろう。西行忌は陰暦二月十六日。満願の花の季である。掲句、「〜一人電車に」の“一人”は、西行の行脚に通い面目だが、文明逸る二十一世紀、あろうことか、花の陽気に電動車での移動である。座「揺られ来し」は“揺られ”に巧まざる諧謔がこぼれ、面白い。

反復するイ母音のリズムは揺られ、漂白する心そのも

のである。加えて、「行く」ならぬ“来し”の反逆が、いやはや覿面。「行く」ならば、臍なし。

鶏小屋の跡形もなく梅匂ふ　　敏子

梅は百花に魁け、古来、その芳香と風姿が好まれ、桜に比べて、風雅の趣が重んじられる。寒さに耐えて咲くことから、寒中になお緑を保つ松・竹とともに、「歳寒の三友」と称せられ、又、その高潔な花姿は、竹・蘭・菊と並ぶ「四君子」の一つとして愛でられた。古歌・古典は、梅を詠んで懐旧、追憶の情が濃い。「吾妹子が植ゑし梅樹見るごとに心咽せつつ涙し流る」（大伴旅人、万葉・三―四五三）。「又の年のむ月に、むめの花ざかりに、去年を恋ひ行きて」（伊勢物語・四）。道實「東風吹かば～」に因む『飛梅』も伝わる。

さて掲句、景物に何の説明を要らず、情感がしみじみ身にしみる。末“匂ふ”が揺るがない。梅は、花の姿もさりながら、その真髄は像の見えぬ匂いにあると思う。蓋し、「匂ふ」を、ここに、敢えていう所以である。余談ながら、「灰捨てて白梅うるむ垣ねかな」（凡兆）。「白梅や誰がむかしより垣の外」（蕪村）。いづれにも諸見あるが、晴雨乾湿、あるいは明暗の間に色かえる、匂いの微妙に感じ、はじめて分かる句だろう。

朝風呂や遠くの山の雪兎　　陽一

朝風呂から残雪の春山を遠望する。山肌、雪の斑は白兎の形。早春の気に大地は再び萌え初める。「や」が浮かず、抜けて、澄む。雪兎の彼方に春光の空がひろがる。さりげなくて深い句だ。「遠くの」が要である。

探梅行拾ひし石の温むまで　　哲也

内観の句、奥が深い。ふと拾った石が握りしめた拳の中で温むまで、梅を求め行く。寒気に開く梅の姿に憧れ、ひとの温もりの大切さを知る心を感じる。秘める強い意思がにじむ

ゼブラゾーンぬりかへ春を待つ沼で　　悦子

「～ぬりかへ」で切れる。沼に沿う舗道のゼブラゾーンを塗り変え中。塗り上がった真新しい縞々の路上をもう直ぐ春の足音が響く。Sprig is just aroud the corner！（これは、六十何年か前、ＮＨＫ・カムカム英語で覚えた一節です。）

裸木のお話会の札下がり　　賀子

お話し会場は入口際の裸木に標識札がぶら下がる図。「裸木の」で半拍切れる。「～に」の方が分かり易いが、説明になる。言い放し、知らん顔の詠みっぷりが、おかしく、面白い。お話し合いは胸襟を開いて…、いいや、そうそう裸に如くはない。はて、会場がオープン・フィルドなんだろうか？

洞門のそこら縄張り若布刈婆　　万世遊

「そこら～」の軽妙なことば捌きが憎い。洞門一帯で

若布刈りに勤しむのは婆達だ。寄る年波は、ご多聞にもれず、いや諸に、若布刈女の足元に弾けるか。春の若波の華やぎはないのかな。ちょと斜眼で世相風刺？　いや、真直ぐなやさしい眼です。そこら読み手に預けて、作者は自若。

自転車の籠を食み出し独活過ぎぬ　　高志

「食み出し」と「過ぎぬ」の“ちぐはぐ”が面白い。山独活（自生）とうど（普通に食する室（地下）栽培）を一緒に口にした気分になる。独活の性を一握りして、目の前に突き出されたようだ。

烏瓜これが種ぞとＰＲ　　陽也

夏は、レース状の白い花を葉腋に開いた烏瓜が、秋、葉が落ち蔓にぶら下がる姿は印象的だ。忘れていたが歳時記を見て思い出した。種子は黒くて蟷螂の頭に似ている。秋陽の烏瓜の孤影と三角形の黒い種を、ふと重ね合わせた感慨である。「ＰＲ」は、なお一考が要るだろう。

（駄句近作）

貝寄せやプリマヴェラに逢ひに行く
花の枝觸れあふ空の薄にごり　　（平21・03・31）

お便り広場（到着順、敬称略）

白金葭十月号頂きました。「軽み以後」すばらしいです。武者昭七さんの「うたを読む」その他全てに圧倒されました。とにかくすばらしい俳誌ですね。頂小葉の写真おくります。ムクロジ　初めて知りました。感謝しております。三十一日は浦和まで出かけますので残念です。たいした俳句もできず申し訳ありません。10・30小山陽也）

拝復　玉誌「白金葭」10月第44（平成二六年十月―二〇一四）を拝受。感謝しています。あと四号で満四年。期待と敬服。

ふくれつつ濁流は押す野分晴　　幸一

芦田川（広島県福山市）や有地川（同市芦田町）の川や山や田畑を想い出し、才町、大橋、戸手の町と福戸橋。その下を流れる赤茶色の濁流と青空に白い雲。戸手高校時代のことや輝くペダルを元気よく踏んで通うセーラー服姿の園子、金子、幸子さんたちの胸のふくらみまでも懐かしく回想。下品でやや卑猥すぎる独断的解釈でしょうか。もう一句

秋暑しダリが時計を曲げてより　　陽一

ダリ（スペインのシュールリアリズムの画家（一九〇四―一九八九。八五歳没）。シュールリアリズムは「非日常的で奇抜な写実主義」とでも記すのでしょうか。不勉強を反省。飴細工のように柔らかく曲った時計、懐中時計の奇妙な作品。金箔多様のクリムト（一八六二―一九一八．五六歳没。オーストリア）や精神異常者的な作品「叫び」のムンク（一八六三―一九四四。八一歳没。ノ

ールウエイ)、さらにピカソ（一八八一―一九七三・九一歳没。スペイン）のキュービズムという美しくない奇抜な作品。一筆描きのデッサンの名人藤田嗣治（一八八六―一九六八。八十二歳没。東京生まれ）のそのデッサンの技量に脱帽敬服したピカソというエピソードや藤田の大作の納められている秋田県立平野正吉記念美術館。「謹啓　政吉親分へ　嗣治」というサインの遊び心までも懐かしく回想。こんな連想や回想を換気してくれる句に感謝して「名句」としたい素人解釈。乞う・御寛恕。感謝して一筆まで。皆様のご健筆を心から祈念申しあげます。

（H26―二〇一四―11・3（月）文化の日はれ）

光成高志様　　机下　　青江由紀夫(河村博巨)

前略　御許し下さいませ　過日本郷吟行句会の折には楽しい（苦しい）一刻をすごさせて頂きました。また句会報をお送り下され、反省のよすがとして熟読させて頂きました。参加皆々様の博識・句の熟練、鑑賞眼の的確なこと・・本当によい機会を頂き感謝でいっぱいでございます。御礼までに十一月十三日　　（菊田比呂子）

本郷吟行句会報有難く拝受しました。高志さんの名文を読みながら余韻を楽しんでおります。十一月の句会は親族揃っての旅行と日が重なりましたので残念ながら欠席させて頂きます。ご盛会を祈ります。

十一月十四日　　武者昭七

お手数をお掛け致します。「羽根になる無患子もある臨済宗」の好意的な評言に感謝申しあげます。久保田豊秋一句短評「俳句会12月号」に書かせてもらいました。折あらば御笑読下さい。寒くなって参りました。「無患子を拾うて剥いてもてあます」固くむいてももて余すより他なし。椋の実なら食べられますよね。それから団栗も炒って食いました今年。蛇苺あの赤い実食えますよ。少し砂糖をつければ絶品。光成高志様H26・11・16　青木啓泰

先の例会ではお世話になりました。楽しいひと時でした。十月例会で頂戴した胡麻は妻が大喜びでした、店の品ではこの芳しさはないと。わが家では息子、嫁、娘の誕生日に赤飯を炊きます。先日、息子の日には早速いただきました。**新胡麻をたっぷり誕生日の赤飯**　寒さが加わります。ご夫妻ともども御身大切にご健吟の程を、草々。

（平26・11・24　飯田孝三）

先日の「白金葭」の次の日にまた千駄木のファーブル館で「小熊座」関係の句会があって行きました。隣の千駄木小の庭の柿の収穫に行きませんかと奥本さんに誘われて、大量の柿を採ったあとの句会をしたところ、ムツオさんが、「柿の句ができて、手持ちの句を出さずに済んだ」と、「柿の実の冷えは昨夜の星の冷え」「素手素顔ながらいずれも柿泥棒」（「素」が当日の席題）で高点を浚ってしまう。皆が帰ったあと、僕は奥本さんと飲み始め

て、虫の話題で終電近くになりました。十二月一日（月）から一週間、銀座の「地球堂」（銀座表通りの新橋より）で国展版画部の小品展をします。通りかかった方は是非お立ち寄り下さい。

（11.26 増田陽一）

受贈誌（十一月号）

山姥の顔の罅割れ郁子熟るる（彩119号）　平野ひろし
磔刑の高さ皇帝ダイリヤ萎ゆ　（〃）　〃
東寺まづ見え新緑の京に入る（飛行雲72号）　駿河岳水
鵜飼待つ舟に物売り舟寄り来　（〃）　〃
秋茄子のかくし包丁無頼顔（あすか十一月号）山尾かづひろ
虚栗田舎の空家ふと浮ぶ　（久寺家中）　亀谷燿司
毬栗が刺さり注射の痛さかな　（〃）　関口みのり

季語探訪〈蒟蒻掘る（冬）〉

光　みち

去る十一月七日予定通りこんにゃく畑を目指して出発した。小春日に恵まれた。高崎駅の上州電鉄乗場はかなり離れていた。還暦祝いに贈られたという赤いウインドブレーカーの正美さんと高志さんと三人の日帰り旅である。上州電鉄の車窓は刈らず仕舞の稔田が多くあり不思議である。そのうち上州福島駅に着いた。三十代の駅員の話は要領を得ず、貸し自転車で二キロ先のこんにゃくパークに向かう。正美さんは久しぶりの自転車らしかったが上り坂を難なく乗れた。途中八十歳前後の男性にこんにゃく畑を尋ねたら親切に役場のアライさんにケータイしてくれたが、昼休みで不在、受付に通じてそこを訪ねるように言われ、役場へむかった。地名は甘楽（かんら）町という。受付の高橋さんが迎えてくれ、役場から見える丘の上に上がればこんにゃく畑があると教えられた。とりあえず直ぐ裏のこんにゃくパークに行き、無料のこんにゃくバイキングでお腹を満たした。まさにこんにゃく腹。観光バスが5台も止まっており、パーク内は混雑していた。工場見学後、丘の上へ上がると山裾まで満目のこんにゃく畑。二ヶ所の畑で蹲って黙々と掘り起こされた蒟蒻芋の選別作業をしていた。俳句を作りに来ました、中へ入ってよろしいですかと断り、話して分かったことは、午前中に持ち帰る分をトラクターで掘り、午後には選別するのだ。二組とも八十代の老夫婦である。この畑はみかん程の大きさで一年玉といって種芋ばかり。種芋は来年春に植え付ける。不良品はこんにゃくにするという。三年玉が完成なので、三年かかる。こんにゃくパークの入口には三十キロという臼のような五年玉が展示されていた。畑からは西に妙義山その奥に浅間山が見えた。午後三時ともなれば上州の空っ風らしい冷たい風が吹きだした。空っ風が強くなる師走には風除けになる山裾の畑の蒟蒻を掘るのだという。行き当たりばったり

の探訪であったが概ね念願は果たせた。

旅のうたを読む　ix　―実朝の歌一首―

武者昭七

箱根路をわが越え来れば伊豆の海や沖の小島に波のよるみゆ　実朝

「この所謂万葉調と言われる彼の有名な歌を、僕は大変悲しい歌と読む。・・僕には詞書にさえ、彼の孤独が感じられる。・・悲しい心には、歌は悲しい調べを伝えるのだろうか。・・はっきりと澄んだ姿に、何とは知れぬ哀感がある。・・」小林秀雄のこの一文（「無常という事」実朝）にぶつかったとき僕は大きな衝撃を受けた。実朝という歌人は万葉調の力強い歌風の主とばかり教わってきたからである。

この歌、頼朝以来の二所詣（箱根権現と伊豆山権現の参拝祈願）の帰り際の歌だという。このあたりいわゆる道行ふうの詠みぶりである。しかしかれの見たものは単なる風景ではなかった。はるかな沖の小島は彼の背負ってしまった「運命」だった。かれは大海に浮ぶ沖の小島におのれの「運命の形」を見たのである。それはまつわりついたまま最後まで振り払うことの出来ぬ「孤独」の影であった。歌の調べが悲しいのはそのせいである。

大海の小島が孤独であるように彼は最初から最後まで無骨で胴欲な坂東の侍たちに囲まれて孤独であった。それがかれの見た風景であったのだと僕は今にして思う。かれが運命としての孤独から逃れることができたとすれば、それは彼が最後の夢を託したあの大船が由比ケ浜べを後にした時だったかもしれない。しかしその願いもむなしく潰えてしまった。彼は孤独なまま死んだ。

実朝は旅の途上でおのれの運命の形をみた。ひとは旅において時に己自身の運命と出会うものだがそれをおのれの運命の形と自覚できるものはすくない。多くは単なる旅の風景として見過ごしてしまうだろう。

詞書は次のとおりである。「箱根の山をうち出て見れば波の寄る小島あり。供のものに此のうらの名は知るやとたづねしかば伊豆のうみとなむ申すと答へ侍りしをききて」

（２０１４．０４．30）

我孫子日記

10／17例会。10／22ＳＯＡ。10／23＊久寺家中。10／27病院。10／29ＳＯＡ→新宿。10／31＊2本郷吟行句会。11／5ＳＯＡ。11／6六本木日展。11／7＊3上州福島。11／10新木近隣センター。11／12ＳＯＡ。11／14＊4萱吟行句会（鳩山会館）。11／15自治会役員会。11／19ＳＯＡ。11／20久寺家中。11／21例会。

＊グラウンド囲む木立の紅葉かな　高志

人の息残る教室冬近し　みち

＊2喜之床より秋陰のスカイツリー　興正

道元様槙櫨を一つ盗みます　宏之助
時雨くる菊坂濡るるほどならず　一艸人
秋の雨頬つたふ菊坂日暮坂　孝三
立読みの本郷下駄のうそ寒く　幸一
槐の実フワリフワリと飛行船　敦子
質店の土蔵の罅に秋薄日　半寿
一葉の通ひし質屋冬めける　静秋
薄紅葉本日休業菊水湯　正美
押してみる一葉が井戸秋の昼　比呂子
水引の白一葉の通ひ路に　みち
断腸花涙の如く露宿し　昭七
急坂を下れば現代十月尽　高志
*3 蒟蒻掘る遠くに妙義山（みょうぎ）浅間山　〃
蒟蒻掘る役場農協下にして　みち
*4 ケネディと命名冬の薔薇錆びて　高志
万両や鳩山邸にもぐら棲む　一艸人
「友愛」の冬薔薇一輪真紅なり　朋子
冬薔薇信楽たぬきそつぽ向き　静秋

編集後記

例会終了後いつもの通り、コビアンに寄って一休みする。今月は、幸一さんの卒寿の祝杯を挙げました。その時、幸一さんの口から発せられた俳句を書いてみます。

平凡社の「俳句歳時記」（一九五九初版）の春の部の雛祭の項に芭蕉の句を冒頭の句として後ろの方に幸一さんの句が掲載されている。大裏雛人形天皇の御宇とかや（芭蕉）草の戸も住替る代ぞひなの家（同）・雛ひさぎ奥のくらきに飯食めり（松村幸一）ひさぎは、鬻ぎと書き、粥のことだという。又、橋本多佳子の選に下の句が入ったとか。目に翳を生むもの遠き散水車（幸一）頤の見えゐて赫し里神楽（同）又、山口青邨選の推薦になった句　稲妻の大き翼に追はれけり（墨東區中根岸町47松村幸一）夜長かけて懺悔の稿を綴るとぞ（同）の掲載されてある俳句S.32をお持ちになって見せてもらった。とにかく御元気である。手賀沼公園内のアビスタまで一里近くもある道を徒歩で来られ徒歩で帰られる。一方、先日喪中はがきを受け取りました中に山田圓子さんが今年五月に逝去とありました。享年九十六歳であります。ここに謹んで哀悼の意を表しますと共に、圓子さんのことは別に触れたいと思います。私の存じ上げている俳人大人（うし）の森下流子さんが四月に九十二歳で亡くなれたことは八月に書きました。不易流行を身に感じます。今月も幸一さん陽一さん孝三さん、お三方の鑑賞文を頂きました。同じ句でも鑑賞は三人三様で面白いです。

白金葭　第45号　平成26年11月発行
編集・発行人　光成高志（TEL&FAX　04-7187-1068）
発行所〒270-1119 我孫子市南新木2-14-17
表紙の題字：加納綾女。写真は十一月23日の白金葭